

異文化理解教育における新たな試み

—個人別態度構造分析による日本人学生の留学前後における異文化観の変容—

前田 ひとみ

(外国語学部英米語学科)

New Attempts in Cross-cultural Education: Transformation of Cross-cultural Views After Studying Abroad Using the Personal Attitude Construct Analysis

Hitomi MAEDA

(Department of English Language Studies, Faculty of Foreign Language Studies)

政府は2020年までに大学生の海外留学を2倍に増やす目標を掲げた。これは少子高齢化や社会のグローバル化が急速に進展する中、グローバルな人材を育成するには異文化理解の促進や国際的素養を培うことが重要であるとし、政府も大々的に海外留学派遣の意義を示している。このように長年にわたり国・民間・研究者レベルで留学の効果や価値に言及した調査が行われており、海外留学の教育的価値に関する研究は国内外共に数多く存在している。しかし、留学前後の学習者自身の変化や成長に着目した研究、及び学習者自身その変化を客観的に把握するようなシステム構築やフィードバックに関する研究はほとんどない。そのため、本研究では異文化理解教育の質的調査の一端として、まずは留学による学習者の異文化観の変容に着目し、この一連のプロセスが個人における異文化理解教育に寄与しうる可能性があるか試みた。本研究は今までになかった異文化理解教育における新たな参加型分析プロセスとしての端緒である。

キーワード：個人別態度構造分析（PAC分析）、異文化観の変容、異文化理解教育、海外留学における学び、自己との対話

1. 本研究の背景と目的

さまざまな視点から「異文化観」についての先行研究（吉川, 1996 ; 徳井, 2002 ; 川内 2006）は存在しており、異文化観だけでなく日本に在住する留学生に焦点を当てた「日本観」に関する調査（岩崎, 2013）や留学経験が自己に与える「意識の変化」に関する調査（早矢仕, 2002）など異文化に接触することによる変化に焦点を当てた研究などがある。これら異文化観に関しては直接経験する機会が少ない事柄についてはメディアによる影響が大きいと言われており（Morgan, M. & Siganiorelli, N., 1990）、

萩原（2012, p.5）は論文の中で「諸外国に関する私たちの認識は、直接経験よりもメディアを介した間接的経験に依拠する部分が多い」と述べ、首都圏9大学において1470名を対象にメディア利用と異文化理解に関する調査を報告している。

また異文化理解に関する研究では、セメスター留学から帰国した学生に対する海外留学における学びの調査がある。これは留学の教育的価値という視点で個人別態度構造分析を使った報告であり、当初、前田（2017）は、語学に関する学びが最多を占めるのではと予想していたが、分析により抽出された学びの多くは「異文化適応能力」に関する項目であり

「自文化への理解と気づき」、及び「他文化への理解(宗教・異文化に暮らす人々に対する理解)」を挙げ、多くの学生が海外での実体験が与えた異文化観への影響について報告している(p.9)。また実体験が与えた異文化観への影響に関しては、井上(2001)の「世界青年の船」に参加した日本人(20～30歳)を対象にした個人別態度構造分析による調査がある。井上(2001)は、乗船前は「国のイメージ」や「物」が挙げられていたのに対し、乗船後は「個人名」へと変化し「人」が主体となっていたと報告しており、参加者にどのような変化があったのか調査している。

このように異文化に接触することで起こる異文化観の変容はいくつかの視点から研究されているが、本研究は都内私立大学に在籍する留学を終えたばかりの学生3名を対象に¹、留学前と後とで異文化・外国人に対してどのような心象の変化があったのかを分析し、個人別態度構造分析による留学前後の異文化観の変容の振り返り作業による自己内での対話が異文化理解教育に寄与する可能性があるかを試みた。

本研究はJSPS科研費JP17K03017を受けたものであり、本研究はその一端を担うものである。また一連の研究プロセスにおいて倫理的配慮の点でも十分に留意し、調査協力者に対し、調査目的、データの利用方法等、倫理的配慮に関する口頭説明、及び文面での説明を行い、研究調査協力者として論文等において個人が特定されないかたちで結果やコメントが出ることや調査協力の回数などの承諾書を提出してもらった。

2. 本研究の手法

本研究の分析手法として「個人別態度構造分析(PAC分析: Personal Attitude Construct Analysis)」を使用する。これは内藤(1993, 2002)によって開発された方法で、PAC分析は質問紙調査のように平均値を求める性質の手法ではなく、自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、研究者による総合的解釈を通じて個人別に態度やイメージ構造を分析する方法

である。そのため、時間と手間がかかり調査対象者は通常数名である。この分析手法は再現性・信頼性が高いといわれ“量的・質的の両方を兼ねた研究手法”として、PAC分析を使用した研究やその有効性に言及する論文²も多く存在することから本分析手法による要素の抽出と概念の構造を把握することを試みた。セメスター留学前と帰国後にPAC分析を実施した(被験者が踏んだPAC分析の手順は注³を参照)。

3. 被験者のデータと分析

次に被験者の属性と留学前に実施したPAC分析結果、および帰国後の調査結果をそれぞれ示す。

3-1. 学生A

学生Aの個人属性:①女、②大学2年、③セメスター留学前のPAC分析結果:14連想項目、4クラスター(CL1:自分の一時的な体験、CL2:外国人は自信や主張が強い、CL3:無意識の行動、CL4:暮らしの余裕)⁴、④留学先:マレーシア

帰国後の調査結果は図1に示すように、連想項目は留学前の14項目から5項目に減り、それ以上時間を与えても連想項目は出てこなかった。この5項目のうち「積極的」というのが一番重要な項目である。帰国後のデンドログラムは大きく2つに分けられ、クラスター1の想起項目は「目標を持っていて平々凡々と暮らしていない」、クラスター2が「周りの目や視線を気にしない」、「自己主張をする」、「自分の意見をはっきり言う」、「積極的」である。

学生A自身の解釈により各クラスターを命名してもらった。結果、クラスター1は〈CL1:目標がある〉と命名し、ある授業でルームメイトもクラスメイトも皆高い目標を持ち、英語を一つのツールとして熱心に勉強し、将来の夢を語っていたが、日本人学生で夢を語れた人はいなかったと語ってくれた。クラスター2は〈CL2:自分を持っている〉でまとめられ、自分の意見を言ったり、質問したりする姿があり、他人がどのように思おうが気にしていない姿が強く印象に残ったと語ってくれた(「周りの目や視線を気にしない」)。また先生が発言しているにもかかわらず、自分の意見を遠慮なく発言する

クラスメートに対しては他人の発言を遮ることなく聞くことのできる日本人は「なんて偉いのだろうと思った」と述べるなど、クラスメートの姿を見て、日本人に対する信頼が強くなったと語ってくれた（[自己主張をする]）。また多くの日本人は友達との約束を優先させるが、マレーシアのクラスメートたちは自分の勉強や自分の予定を優先して「自分

の意見をはっきり言う」場面にも遭遇したという。異文化や外国人に対するイメージは[積極的]という項目があがり、人間関係の構築方法や勉強の仕方や学び方など、生き方そのものが積極的であるとの印象を得た。

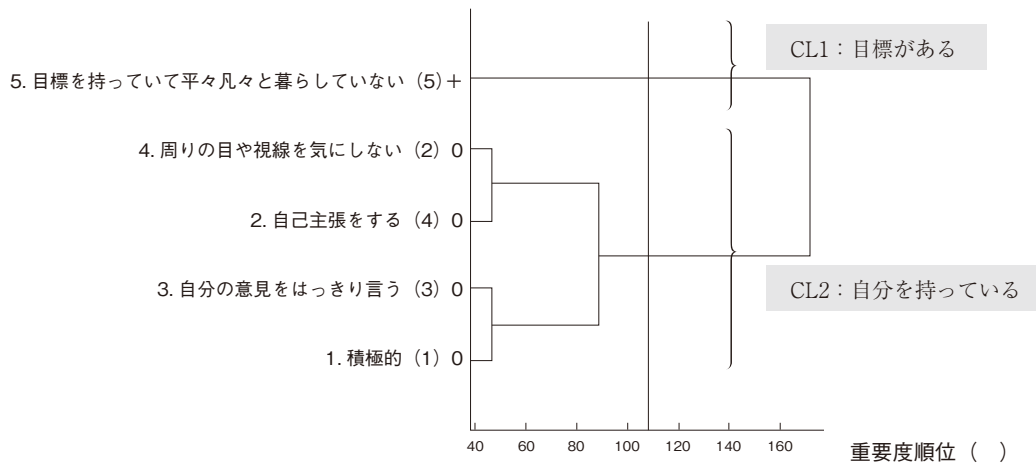


図1 学生Aのデンドログラム (帰国後)

3-2. 学生B

学生Bの個人属性:①男、②大学2年、③ Semester留学前の調査:9連想項目、3クラスター (CL1:日本人だと、からかわれる、CL2:アメリカ人の人間性、CL3:海外の人はポジティブ)⁴、④留学先:カナダ

帰国後の調査では図2に示すように、連想項目は留学前の9項目から8項目に減り、異文化・外国人に対する印象として、学生Bにとって、[異文化に慣れるのに時間がかかる]というのが一番重要な項目である。帰国後のデンドログラムは2つに分けられ、クラスター1の項目は[外国人は先のことをあまり考えずに行動する]、[外国人は積極的な人もいればそうでない人もいる]、[外国人でも自分と同じ性格の人だと話しやすい]、[外国人の考えを理解することが難しい]である。クラスター2は[異文化に必ず慣れるとは限らない]、[異文化に慣れるのに時間がかかる]、[異文化を学ばば他人に教えることができ共有できる]、[異文化を学ぶことで新しい発見がある]である。学生B自身の解釈により各クラスターを命名してもらった。結果、クラスター1

は〈CL1:一言では定義できない多様さがある〉でまとめられ、現地で休みの日にアラビア人のクラスメートの誘いで、数人でレストランに車で出かけた話をしてくれた。誘った本人はレストランの開店時間すら調べておらず、そうなったらその時に考えるというスタンスだったことに驚き、また別の時には、学校行事で博物館に行くことになり、待ち合わせ時間の10分前に中国人のクラスメートから昼食を誘う電話があり、「もう少しで時間だ」と答えたが大丈夫と言って結局遅刻してきた話をしてくれた。このような実体験が[外国人は先のことをあまり考えずに行動する]というイメージに繋がったようだ。次に、留学する前は“外国人は積極的だ”と思っていたが、留学生の中にはおとなしくて積極的でない人にも遭遇し、自分の今まで築いてきた外国人に対するイメージが壊れ、目から鱗が落ちるように客観的に見れるようになったと語ってくれた（[外国人は積極的な人もそうでない人もいる]）。また新たな発見としては「自分は積極的な方ではないと思っていたが、海外の人でも自分と同じような人が必ずいることが分かり、その人たちとは話しやすいという

ことが分かった」と語ってくれた（[外国人でも自分と同じ性格の人だと話しやすい]）。また日本人は察する事に長けているが、外国にはいろいろな考え方や宗教があり察することが難しいと語り、例えば「授業中クラスメートが困っていたようだったので、“空気”を察して“これはこうだよ”と教えてあげたけど、“自分のことに集中して”と言われ全く助けを求めてはいなかったことに気づいた」と語り、察するという能力は日本人同士ではその効果を最大限に発揮することができるが、異文化の中ではそのようなことはなく、難しいと述べた。次にクラスター2は〈CL2：異文化に適応することは難しい〉でまとめられ、こと食文化についてはなかなか慣れない様子が語られた。またバスの乗車や降車の仕方に関しても日本との違いに戸惑い、乗車中は緊張のしっ

ぱなしだったと語り、生活習慣であるチップもなかなか慣れずレストランでの会計時のチップの計算の仕方や店員への渡し方、カード払い時のチップの渡し方など、生まれ育った環境にはなかった生活習慣には根本的に最後まで慣れることはなかったと話していた。また日本にはないサマータイムには大いに戸惑ったようで、“ある日のある時間”を境に一齐に時計を操作し、1時間遅くなったり、早くなったりというのは気持ちがついていかなかったと話してくれた。しかし留学生と同じ教室で学ぶ機会を通し、自分の国のことも理解することができ、留学生に教えたりと文化の話からディスカッションへと発展したり、新たな発見があり、異文化や外国人に触れることで、少しずつ偏見が剥がれ落ちたと様々な経験を語ってくれた。

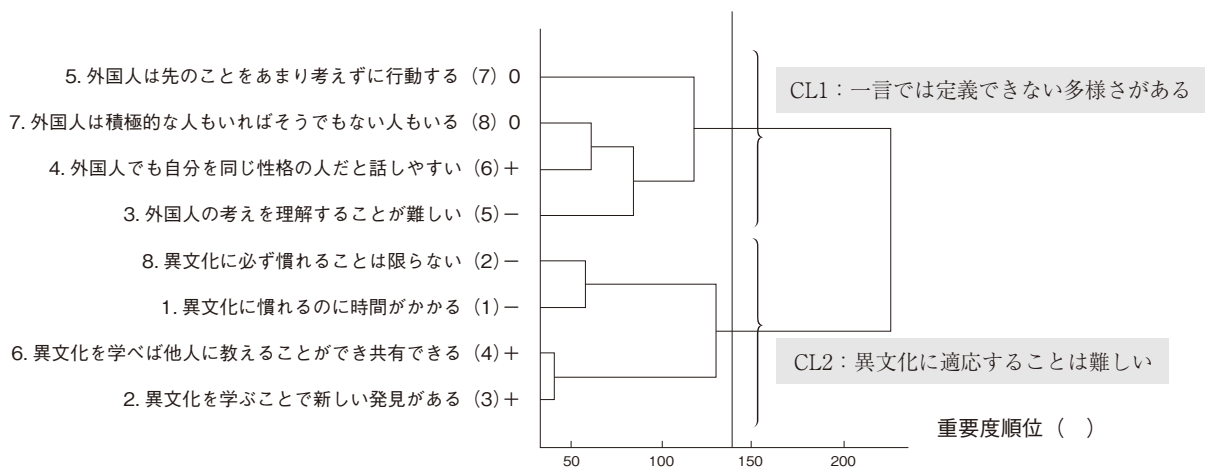


図2 学生Bのデンドログラム(帰国後)

3-3. 学生C

学生Cの個人属性：①男、②大学2年、③セメスター留学前の調査：11連想項目、3クラスター（CL1：アメリカ人の性格、CL2：日本との違い、CL3：マイペース）⁴、④留学先：カナダ

学生Cの帰国後の調査では図3が示すように、連想項目は留学前の11項目から5項目に減り、異文化・外国人に対する印象として、[フレンドリー]というのが一番重要な項目である。

帰国後のデンドログラムは2つに分けられ、クラスター1の項目は「言わなきゃ伝わらない」、[受け入れてくれる]で、クラスター2が、[積極的]、[上下関係がうすい]、[フレンドリー]である。学生C

自身の解釈により各クラスターを命名してもらった。結果、クラスター1は〈CL1：意思表示がはっきりしている〉であり、日本人のように遠まわしに言ったら伝わらないということあげた。あるとき友人が手料理を出してくれて美味しくなくて苦笑いをしながら「うーん…美味しい」と「まずいよー」という顔をしながら肯定文を使ったところ、顔の表情や間の置き方でなく、言った言葉そのものを受け取られ「おいしい」と思ったようで、次行った時も同じ料理だったと語ってくれ、直接的な表現でストレートに言わないと伝わらなかった経験を話してくれた。学生Cのコミュニケーションの取り方は至極日本的で顔の表情や声のトーンで美味しくないと

という表現をし、察して欲しいと暗に伝えたつもりであったが、それは通じず、言葉通り受け取られたという経験で、日本的なコミュニケーション方法とは何なのか認識し考える機会になったという。また「受け入れてくれる」というのは、学生Cの国である日本や日本食、日本語などを理解しようと努めていたことや、彼らの知っている日本の知識を学生Cと共有しようとする寛容さも同時に垣間見ることができたという。クラスター2は〈CL2：日本人と比べてフレンドリー〉と命名し、日々の生活の中で頻繁に目にする「積極的」な態度や「フレンドリー」さをあげた。学生Cはコミュニケーションの取り方に対して、「日本人は全体的に受け身であり、そ

れは語学力の問題ではなく、変な事言ったら嫌だとか、周りからの評価を気にするが、彼らからはそのようなことは感じられず、コミュニケーションの取り方が積極的であり、日本人は損だと思った」と、コミュニケーション方法に言及した。また授業中にも外国人留学生は「俺、天才だから!」とか「俺、授業できるし!」など発言することが多く、学生Cは「日本人ならこういうことは絶対に言わない。何言ってんの?と引くし、冷める。でも海外は熱い」と分析した。また学校のイベントでも彼らは、ステージの最前列で盛り上がっていたが、日本人留学生たちは皆、後ろの方で写メや動画を撮り消極的な様子だったと語ってくれた。

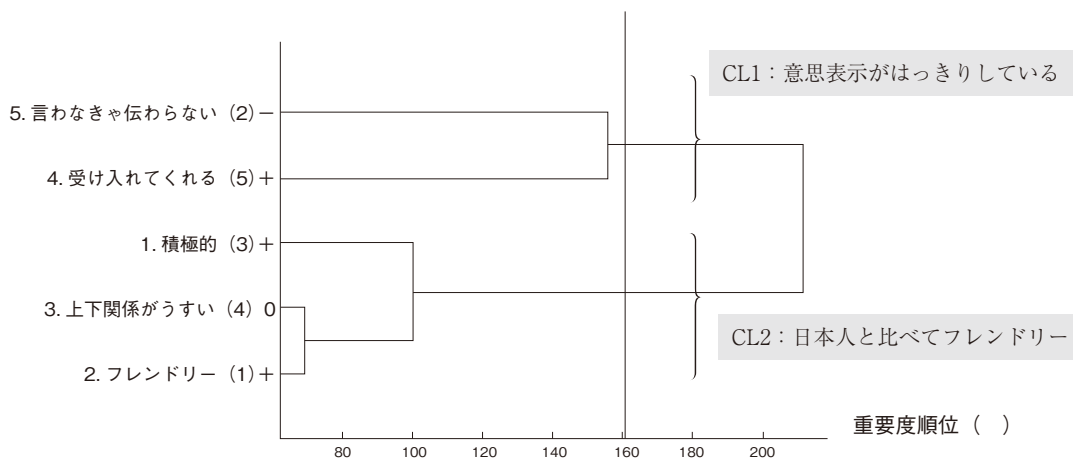


図3 学生Cのデンドログラム（帰国後）

4. 考察

本研究では異文化観の変容を観察するため、海外留学参加学生が異文化・外国人に対してどのような心象を持っているのか留学前と帰国後における異文化観について個人別態度構造分析を使用し要素の抽出と異文化観の構造を把握することを試みた。

結果、本研究の興味深い発見として、被験者の外国人や異文化に対する想起項目は帰国後には一様に減っている点があげられる（表1）。サンプル数が少ないので今後はサンプル数を増やし更なる検証をする必要があるが、約4か月間にわたり海外で生活すれば、時間的密度や経験値からも想起項目数も多くなるのでは推測していたが、帰国後は一様に減っており、これは実体験を通して様々な偏見や単純化

されたイメージが削ぎ落ち、文化に対する“表現の慎重さ”が逆に表出したものでないかと推測している。

学生Aの留学前のデンドログラムでは〈CL1: 自分の一時的な体験〉、〈CL2: 外国人は自信や主張が強い〉、〈CL3: 無意識の行動〉、〈CL4: 暮らしの余裕〉と4つのクラスターが表出していたが（表2）、帰国後はニュートラルを表す「0」がほとんどであり、〈CL1: 目標がある〉と〈CL2: 自分を持っている〉のよりポジティブで中立的な表現でのクラスターが出現した（図1）。これは留学を通して異文化や外国人の多面性に触れることで以前の偏った見方が自身の中で中和できたのではないかと推測する。また学生Bだが、留学前調査によると、学生Bにとって「外国人」とは、すなわち「アメリカ人」のこと

であり、異文化に対するイメージの大部分はハリウッド映画や日本のバラエティー番組からきており、日頃もっとも目にする情報により学生Bの異文化観は形作られ、〈CL1：日本人だとからかわれる〉、〈CL2：アメリカ人の人間性〉、〈CL3：海外の人はポジティブ（注：海外の人＝アメリカ人）〉と3つのクラスターでまとめられていた（表3）。しかし帰国後は、〈CL1：一言では定義できない多様性がある〉、〈CL2：異文化に適応することは難しい〉と2つのクラスターでまとめられ（図2）、単純化してきた自身を戒めるような文言となっていた。

学生Cは留学前には〈CL1：アメリカ人の性格〉、〈CL2：日本との違い〉、〈CL3：マイペース〉と3つのクラスターが表出していたが（表4）、帰国後の想起項目数は11から5に減り、また〈CL1：意思表示がはっきりしている〉、〈CL2：日本人と比べてフレンドリー〉となった（図3）。留学前には学生Bも学生Cも、外国に対するイメージの大半がテレビや映画からきており、出てくる語彙も少なく、メディアから得たイメージが自身の“異文化観”として語られ言葉の端々に許容文言（～かもしれない）が少なく断言しがちな傾向があったが、帰国後はよりニュートラルで相対的な文言で語られていた。

今回の調査で、帰国後は①想起項目数の減少やクラスター名を見る限り、被験者の異文化に対する表現の慎重さが表出した可能性があり（学生Aは-64.3%、学生Bは-11.1%、学生Cは-54.5%）、また②想起項目は実体験を踏まえての具体的な実体験で語られ、十把一絡げ的な表現や断定的な文言は影を潜め、またクラスターにおいてもそのような傾向は見られなかった。これら2点のことから留学前には異文化に対する認識や固定化された概念の多くは普段目にする異文化の差異を強調したものに触れる機会が多いからであり、固定化された文化概念が強く認識されているといえ、メディアからの影響は強力であるが、留学中の実体験はそれ以上の影響力を持って個人の異文化観を塗り替え、それらが帰国後は表出していた可能性があることを指摘したい。

また、帰国後、自身の“留学前デンドログラム”を振り返ってもらい、留学前の異文化観が帰国後も同じであれば○、異なっていれば×と回答してもらった。結果、学生Aは異文化観の合致率が50.0%

であり（表2）、「留学前の異文化観の半数は間違っていた」と回答した。学生Bの合致率は11.1%（表3）、学生Cの合致率は36.3%となり（表4）、全体的に留学前の異文化観と帰国後の異文化観は大きく変化しており、それを被験者が一つ一つ振り返りながらの作業は自己との対話を生み出した。留学先の文化圏と学生の留学前後の異文化観の変容の違いの差がもたらす意味はここでは不明だが、被験者自身が留学前の自己と留学後の自己を比較することで自身の変化や個人の持つある種の固定観念を顧みるといふ点で、被験者の心のうちに入るプロセスは個人に対する異文化理解教育として、自己内での対話に役立っている可能性を示唆した。

表1 想起項目数の増減

項目数の増減	学生 A	学生 B	学生 C
留学前	14	9	11
帰国後	5	8	5
差	-9	-1	-6
増減 (%)	-64.3%	-11.1%	-54.5%

表2 学生Aの帰国後の振り返り
(留学前の異文化観の正否)

想起項目	留学前の異文化観 (重要度順位)	正否	クラスター
14	親と子どもで親を頼りにし過ぎている (14)	×	CL1：自分の一時的な体験
6	黒人と白人がはっきり分かれている (13)	○	
9	食べ物がおいしくなさそう (11)	×	
8	洋服を着飾らない (8)	○	CL2：外国人は自信や主張が強い
4	ジェントルマンが多い (6)	○	
13	日本の学生に比べて大人びている (5)	×	
11	夢を持っている人が多そう (7)	○	
1	積極的 (1)	○	CL3：無意識の行動
5	親切さに欠ける (12)	×	
12	他人よりも自分の意見を尊重する文化 (10)	×	
2	宗教に対して強い (2)	×	CL4：暮らしの余裕
7	家族とのコミュニケーションの時間が長い (9)	○	
3	よく食べる (4)	×	
10	時間に追われていない (3)	○	
	異文化観の合致率 50.0%	7/14	

表3 学生Bの帰国後の振り返り
(留学前の異文化観の正否)

想起項目	留学前の異文化観 (重要度順位)	正否	クラスター
5	日本人だと、からかわれる (8)	×	CL1:日本人だとからかわれる
7	頭が良い (9)	×	
9	子供のころから将来に対する設計図を明確に考えている (7)	×	CL2:アメリカ人の人間性
2	自己中心的 (6)	×	
8	自分の意見をはっきりと述べる (4)	○	
4	話すのが速い (1)	×	
6	パーティが大好き (2)	×	CL3:海外の人はポジティブ
1	積極的 (5)	×	
3	常に明るい (3)	×	
異文化観の合致率 11.1%		1/9	

表4 学生Cの帰国後の振り返り
(留学前の異文化観の正否)

想起項目	留学前の異文化観 (重要度順位)	正否	クラスター
8	散らかしてもそこまで気にしない (8)	○	CL1:アメリカ人の性格
9	パーティ大好き (5)	○	
1	大胆 (3)	×	
3	アグレッシブ (2)	×	CL2:日本との違い
10	食べ物がデカイ (11)	×	
11	休暇が長い (10)	×	
6	カップゲ (7)	×	
7	白黒はっきり (1) している	○	CL3:マイペース
5	時間を守らない (9)	×	
4	マイペース (6)	○	
2	楽観的 (4)	×	
異文化観の合致率 36.3%		4/11	

5. まとめと今後の展望

本研究の1つ目の目的として、異文化観の変容を観察するため、海外留学参加学生が異文化・外国人に対してどのような心象を持っているのか留学前と帰国後における異文化観について個人別態度構造分析を使用し要素の抽出と異文化観の構造を把握することを試みた。本研究から、帰国後の想起項目やデンドログラムを見る限り、帰国後はより“表現の慎重さ”が表出する傾向にあるというということが指摘できる。つまり留学前の異文化観の大部分はメディアからの影響が強く、萩原 (2012) は「テレビ

を通じて私たちは、実際に訪れるよりもはるかに広い世界を毎日のように眺めているし、実際に会うよりも多くの国の人たちに出会っている」(p.5)とし、マスメディア、とりわけテレビが我々の各種情報の主たる入手源 (2007a, 2007b, 2012) となっていると述べているように留学前の異文化や外国人に対するイメージの大半がテレビなどから得たものであったものが、ある国に滞在し多くの人と出会うことで多様性に触れ、逆に単純な言葉で“異文化”を想起することが難しくなり、これが“文化に対する表現の慎重さ”に繋がったのではないかと分析している。しかしサンプル数も少ない為、このように分析するのが正しいのか今後はデータ数も増やして検証する必要がある。

また本研究の2つ目の目的である被験者自身の留学前後の異文化観の振り返り作業における自己との対話は異文化理解教育として寄与しうるか試みたが、これは被験者が帰国後、統計的に処理された自身のデンドログラムを見比べることで、自身の変化を客観的に見比べることができ、またデンドログラムは被験者本人が気づかなかった深層部分にあるモノが見えやすい塊 (クラスター) となることで、より項目間の繋がりが鮮明となることから被験者自身が自己内における対話が進みやすいという可能性を見出した。サンプル数も少ない為、今後の研究に繋げる必要があるが、例えば、学生Bの〈CL2.異文化に適應することは難しい〉は、[8.異文化に必ず慣れるとは限らない]と[1.異文化に慣れるのに時間がかかる]という2つのマイナスの項目と[6.異文化を学ばば他人に教えることができ共有できる]、[2.異文化を学ぶことで新しい発見がある]というプラスの面が混在し、重要度順でも上位にあった事から異文化に適應する上での本人の心の葛藤と異文化を学ぼうとする肯定的な姿勢が見て取れた。また学生Aは留学前のデンドログラムでは14もの項目があげられプラスとマイナス面が混在していたのに対し、留学後は想起項目が5項目に減っただけでなく、異文化への評価パターンが全体的にニュートラルになり、異文化に対しより客観視できるようになった傾向を本人が意識することができたというのは大きいかもしれない。このように被験者が自身のデンドログラムを見て、異文化に対する見方がある

形として認識することで、自身への問いかけや経験の振り返りをする上で重要な時間となった可能性がある。

本研究は規模は小さいながらも個人における異文化理解教育の萌芽的試みであるが、今後は留学が被験者の異文化観に与える影響に関して、サンプル数を増やした調査も行い、また今回、“個人に対する異文化理解教育”の一つの方法として、被験者自身が留学前と帰国後のデンドログラムを使用し、自身の異文化観を振り返る作業を研究に組み込んだが、今後はこの機能性を発展させ、統計的に処理されたデータにより自身の変化と留学における学びと成長を認識することができるようなフレームワークの構築を目指していく所存である。

さいごに、本手法はある文化の一部分をむやみに切り取り“ステレオタイプ化”することや他者がステレオタイプの異文化を教授することを避け、自分の文化的経験を“俯瞰的”に振り返りながらその経験を“理解”していくという本手法ならではのメリットが浮き彫りとなった。塚本(1987)は「外からの働きかけこそが教育が果たすことのできる任務」(pp.32-33)であると述べ、また前田(2016a)はPAC分析は“科学的な外からの働きかけ”(p.11)であるとし、外からの働きかけの重要性とPAC分析の強みを述べている。前田(2016a)は学生自身がPAC分析を通して「留学における学びのプロセスを整理し、異文化理解につながる生成プロセスを第三者的に客観視できる」とそのPAC分析の強みを述べているように、本研究で使用したPAC分析という外からの刺激を与える手法は、学習者(被験者)の中で留学前後の自分自身と経験との関係性を含む自己との対話の中で異文化理解教育が進んでいくという強みがある。対話という視点では多田(2006)は異文化間においての対話の重要性を述べており、対話とは「目的を持った話し合い」、「相互に影響を与え合う言語・非言語活動」(pp.44-36)と定義しており、異文化理解教育というフレームの中では、他者との対話にとどまらず、過去の自分と現在の自分との関係性を通して自己との対話を繰り返していくことも文化に対する学びの一つの体系と言えるのではないか。教育とは外からの働きかけであり刺激である。これはeducation(教育)とはラ

テン語で“引き出す”に由来し、学習者の可能性を外からの働きかけによって引き出すことを意味しており、つまり異文化理解教育とは教える教科に留まらず、学習者の理解が進む手助けとなるような“刺激”と“場”を与えることに他ならない。

[注]

- 1) 異文化観の変容という比較の視点から本論文では前田(2016b)で取り上げた3名の学生の留学前のデータに触れたがPAC分析は量的研究のようにデータを一般化したり平均値を求めたりすることが目的でなく、“個人別態度構造”を分析することを目的としている。また分析手順が膨大なため、通常調査対象者は数名で行われている。
- 2) PAC分析を使用した研究やPAC分析の妥当性と有効性を検証した研究も多くある(新館・松崎, 2011; 濱川, 2009; 八若, 2007; 佐々木, 2012; 今野・池島, 2007)。また統計処理の留意点については小澤・丸山(2009)や小澤・坪根・嶽肩(2011)を参照願いたい。
- 3) 被験者が踏むPAC分析の手順: ①連想刺激文が与えられる。②連想した順に1語ずつ用意されたカードに書く。③②のカードを重要だと思う順に並べ替える。④カードの全ての対を対象に関連度の近さを7段階で評価を行う。調査者は④の情報(類似度距離行列)をコンピューターに入力し、Ward法に基づくクラスター(CL)分析を行いデンドログラムを作成する。使用した統計ソフトはMATLAB©である。⑤デンドログラムに基づいたインタビューを受ける。⑥各連想項目のイメージが(+), (-)、どちらともいえない(0)のいずれに該当するか答える。各図の左側の数字は想起された順位を示し、カッコ内は重要度順位を示している。また各項目に対するイメージを(+), (-)、(0)で表している。
- 4) 留学前における学生A、学生B、学生Cの想起項目名とクラスター名はスペースの関係上それぞれ表2、表3、表4に集約した。

《参考文献》

- 井上孝代 (2001) 「“世界青年の船” 日本人参加青年の体験の意義とマクロ・カウンセリング的援助」, 心理学紀要, 明治学院大学心理学会, Vol.11.
- 岩崎典子 (2013) 「留学前後の日本語学習者の日本観・日本語観」, 比較日本学教育研究センター研究年報第9号, pp.155-180.
- 小澤伊久美・丸山千歌 (2009) 「PAC分析における好ましい統計処理とは: ソフトウェアによってデンドログラムが相違する問題への対処のために」, 『ICU日本語教育研究』, 6, ICU日本語教育研究センター, 2009, pp.27-47.
- 小澤伊久美・坪根由香里・嶽肩志江 (2011) 「PAC分析法における統計処理の留意点—よりよい実施とデータ解釈のために」, 『日本語教育実践研究フォーラム報告』, pp.1-10.
- 川内規会 (2006) 「大学生の異文化適応と心理的不安の変化に関する研究」, 『青森県立保健大学雑誌』, 7巻1号, pp.37-43.
- 今野博信・池島徳大 (2007) 「個人別態度構造 (PAC) 分析によるピア・サポート活動の効果測定 of 検討—大学生に夜中学生へのピア・サポート活動を対象にして」, 『ピア・サポート研究』, Vo.4, pp.19-26.
- 佐々木良造 (2012) 「PAC分析を用いた日本語ボランティアの態度と態度の変化に関する研究」第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム要旨.
- 新館啓一・松崎学 (2011) 「教師の自己分析へのPAC分析の適用可能性に関する研究—筆者自身の新任期の自己成長を振り返ることを通して」, 『山形大学教職・教育実践研究』, 6, pp.27-37.
- 多田孝志 (2006) 『対話を育てる—「共創型対話」が拓く地球時代のコミュニケーション』, 教育出版.
- 徳井厚子 (2002) 「短期語学研修におけるコミュニケーション意識とイメージの変化—ユタ大学短期英語研修プログラムの事例」, 『信州大学教育学部紀要』, 107号, pp.25-33.
- 八若壽美子 (2007) 「学部・大学院留学生の日本語学習における自己評価の変容—PAC分析による事例的研究」, 『言語文化と日本語教育』, 33号, pp.117-120.
- 萩原滋 (2007a) 「大学生のメディア利用と外国意識—首都圏13大学での調査結果の報告」, 『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』, 57, pp.5-33.
- 萩原滋 (2007b) 『テレビニュースの世界像—外国関連報道が構築するリアリティ』 勁草書房.
- 萩原滋 (2012) 「異文化理解とテレビの役割—大学生調査の報告」, 『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』, 62, pp.5-32.
- 濱川祐紀代 (2009) 「大学院留学生の漢字学習に関する意識調査—PAC分析による事例研究」JSL漢字学習研究会誌1号, 国際交流基金日本語国際センター.
- 早矢仕彩子 (2002) 「日本人学生の留学経験と自己に関する意識の変化に関する縦断的研究」, 『静岡大学人文論集』, 53 (1), pp.39-55.
- 前田ひとみ (2016a) 「国際理解教育における新たな参加型分析プロセスと成果検証方法の提案」, 『国際理解教育』, Vol.22, pp.3-12.
- 前田ひとみ (2016b) 「個人別態度構造分析による異文化観に関する心象の一考察」, 『目白大学高等教育研究』, 第22号, pp.1-10.
- 前田ひとみ (2017) 「個人別態度構造分析による日本人学生の海外留学における学び」, 『目白大学高等教育研究』, 第23号, pp.1-10.
- 内藤哲雄 (1993) 「個人別態度構造の分析について」『人文科学論集』, 27, pp.43-69.
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC分析実施法入門「改訂版」: 個を科学する新技法への招待』, ナカニシヤ出版.
- 吉川茂 (1996) 「留学生・異文化に対する日本人大学生のイメージ」, 『阪南論集』, 31, 4, pp.63-77.
- Morgan, M., & Signorielli, N. (1990). Cultivation analysis: conceptualization and methodology. In N. Signorielli & M. Morgan (Eds.), Cultivation analysis new directions in media effects research. Newbury Park, Ca: Sage.

[謝辞]

本研究はJSPS科研費JP17K03017の助成を受けたものであり、本論文はその研究の一端を担うものである。

(受付日:2018年10月26日、受理日2018年12月11日)

